

① さかりをば見る人おおし散る花の あとを訪うこそ情なりけり

臨濟宗・夢窓疎石禅師（南北朝時代1275～1351）

② 病いがまた一つの世界をひらいてくれた 桃 咲く
（坂村真民）

③ 桃の花に心を明らめるゝ靈雲志勤禅師悟道の機縁（靈雲見桃花） 見色明心
唐代の人。瀉山靈祐（七七一～八五三）の弟子

「靈雲志勤禅師は三十年の辦道なり。あるとき遊山するに、山脚に休息して、はるかに人里を望見す。ときに春なり。桃花のさかりなるをみて、忽然として悟道す。偈をつくりて大瀉に呈するにいはく、

三十年来剣を尋ぬるの客

幾回か葉落ち又枝を抽く

桃花を一見してより後

直に如今に至って更に疑わず

（『正法眼蔵』「溪声山色」）

春風にはころびにけり桃の花 枝葉に残る疑いもなし

曹洞宗・道元禅師（1200～1253）